

『レ・ミゼラブル』の変遷

—ミュージカル『レ・ミゼラブル』人気の理由—

140454 友永 純菜

序章

ミュージカル『レ・ミゼラブル』は、1985年のロンドンでの初演を皮切りに現在までロンドン公演を続ける人気作品である。そしてミュージカル『レ・ミゼラブル』は42カ国にもものぼる国で上演を成功させ、さらに英語から21カ国もの言語に翻訳されて上演されている。例えば日本では、日本語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』が1987年6月に帝国劇場で初演を迎えてから2017年には30周年を迎えるほどのロンドン公演を記録している。世界各地でロンドン公演が続く中、2012年にミュージカル『レ・ミゼラブル』を完全映画化した作品が公開されアカデミー賞の候補に選出されるなど話題となった。

ミュージカル『レ・ミゼラブル』は、作詞家アラン・ブーブリル (Alain Boublil, 1941-) と作曲家クロード=ミッシェル・シェーンベルク (Claude-Michel Schönberg, 1944-) という2人のフランス人が原作小説を約3時間にまとめ上げた作品である。そのため英語版ミュージカルのパン1つを盗んだという罪のために19年間投獄され、このような法律を作り出した社会を憎んでいたジャン・ヴァルジャンが、愛に触れることによって更正していくという物語のあらすじは、ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) が著した小説 *Les Misérables* (1862) とほとんど同じである。原作小説は日本語で文庫本5冊分にも及ぶ大作小説であるが、出版当初から人気があり現在でも世界で読まれ続けている名作である。しかし大作である原作小説は複雑であり、ミュージカル作品を先に観劇した者にとって、物語とは関係のない挿話が多くとても読みづらい作品といえる。ミュージカル作品の魅力は物語にあり、ミュージカル製作者による物語の要約にあるのではないだろうか。

そこで原作小説『レ・ミゼラブル』から英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』への変遷をたどり両者の差異を明らかにすることでミュージカル『レ・ミゼラブル』の人気の理由を探求していくことを本論文の主題とする。これにより大衆文化であり研究対象とされない作品の分析を試みることを本論文の目的とする。以後本論文では、ユゴーが著した原作 *Les Misérables* (日本語訳：佐藤朔，新潮社，1967年) を原作小説、1985年にロンドンで初演されたミュージカル『レ・ミゼラブル』を英語版ミュージカル、2012年にトム・フーパー監督により英語版ミュージカルを元に製作された映画『レ・ミゼラブル』を映画版とする。また、各国で英語版を翻訳して上演されているミュージカル『レ・ミゼラブル』は「日本語版」のように各国の言語に「版」をつける形で表現する。

第1章では原作小説が書かれた背景を明らかにする。第1節では原作小説が書かれた19世紀フランス社会とはどのような時代であり、原作小説の作者であるユゴーが主導したロマン主義運動とは何かについて論じる。そして第2節では19世紀フランス社会に生きたユ

ゴーがどのような役割を担い生きていたかについて詳細に記述していく。またユゴーの人生において原作小説『レ・ミゼラブル』が代表作の1つであることを確認する。

第2章では、英語版ミュージカルと比較するために原作小説について論じていく。第1節ではユゴーがどのように原作小説を作りあげたかを論じていく。そして執筆過程から原作小説の主題を考察したうえで原作小説の中で最もユゴーの思想が詰まっており英語版ミュージカルと最も異なる部分である「哲学的部分」を第2節で考察し、原作小説の意義を論じる。第3節では哲学的部分と異なり、英語版ミュージカルとほとんど同じである登場人物が原作小説ではどのように描かれているかを論じていく。

第3章では、第2章で分析した原作小説をふまえて、原作小説と英語版ミュージカルを比較しながら人気の理由を探究していく。第1節ではミュージカルの制作過程について論じる。英語版ミュージカルは、原作小説から直接作られたわけではなくフランス語版ミュージカルをもとに作られている。そこで原作小説から英語版ミュージカルが完成するまでの経緯をブーブリルとシェーンベルク、そしてプロデューサーのイギリス人キャメロン・マッキントッシュの3人のインタビューと先行研究を基に論じ、英語版ミュージカルがどのような作品となったかを明らかにする。それをふまえて第2節では、英語版ミュージカルのレビューと演劇評論家の意見から英語版ミュージカルが実際にどのような評価を受けているかを述べる。そして第3節では原作小説と英語版ミュージカルを比較し、相違点を明らかにしたうえで人気の理由を結論付ける。

1. 原作小説成立の背景

原作小説は1815年から1832年のフランス社会を舞台に描かれている。そこで本章では、ユゴーが舞台にした19世紀フランス社会とはどのような時代であったのか述べる。さらに19世紀フランス社会を生きた作者ユゴーはどのような人物であったのか論じ、原作小説『レ・ミゼラブル』はユゴーの作品の中でどのような位置付けであるか明らかにしていく。

1-1 19世紀フランス社会とロマン主義

本節では、ユゴーが生きた時代であり原作小説の舞台でもある19世紀のフランス社会と、その時代に成立したロマン主義文学について論じる。19世紀フランス社会はフランス史上稀に見るほど政治体制の変転が激しかった時代である。それはフランス革命が原因であった。1789年にフランス革命が起こりフランスおよびヨーロッパの歴史を大きく変えたが、そのようなフランス革命には抵抗や反動が伴った。革命を肯定し民衆とともに革命を継続しようとする者たちが共和派と呼ばれ、のちに左翼と呼ばれるようになる。これに対して革命を否定し旧体制の王政に戻そうとする者たちが王党派と呼ばれ、のちに右翼と呼ばれるようになる。19世紀フランス社会は、この共和派勢力と王党派勢力との対立、抗争の時代であったといえる。

この対立、抗争をまず武力によって終結させたのがナポレオン・ボナパルトである。ナポレオンは1799年11月9日、ブリュメール十八日のクーデターを敢行し中央集権的な体制を作り上げて1804年に皇帝の座についた。そしてここから第一帝政が始まった。ナポレオンは領土を拡大するため、また革命の理想を広めるために周辺の王政各国との戦争を繰り返して、続けて勝利していく。しかし1812年のモスクワ遠征の失敗を機に第一帝政は徐々に弱体化し、1814年にライプツィヒでオーストリア、プロシア、ロシアとの戦いに敗退すると、ナポレオンは退位を余儀なくされた。

第一帝政に代わって成立したのはルイ18世による第一次王政復古体制であり、ナポレオンはエルバ島に追放された。しかしナポレオンは戦争の事後処理のためのウィーン会議が長引いている隙をついて1815年にフランスに帰還し一時権力を奪い返したが、結局百日天下となり、同年6月のワーテルローの戦いで完敗しセント・ヘレナ島に流される。ナポレオンに代わり再びルイ18世が復帰して第二王政復古の時代になり、旧貴族やカトリック勢力などの王党派や保守派が復権することになった。しかしルイ18世は旧体制に戻そうとする時代錯誤的な政治を行ったため民衆の不満が増えた。

ルイ18世の没後引き継いだ弟のシャルル10世は1830年7月に議会解散、出版の自由の廃止、選挙法改悪を命じる王例を發布するといったさらなる反動政策を推進した。これに抗議したパリの民衆が蜂起して王政復古の時代を終焉させ、シャルル10世は退位しロンドンに亡命した。これが七月革命と呼ばれるもので、この革命により七月王政が成立する。代わって王位についたのはブルボン王朝の傍系オルレアン家のルイ・フィリップであったが、実権をにぎったのは共和派ではなくブルジョワジーと呼ばれる新興富裕階層のエリー

トたちだった。彼らは民衆の権利や生活改善を優先しなかったため、七月王政の間も共和派や民衆たちの蜂起、暴動がパリやその他の地方でも度々起こった。そして1848年、民衆の手によって二月革命が起こる。2月に行われた共和国大統領選挙でナポレオン1世の甥ルイ＝ナポレオン（後にナポレオン3世となる）が当選する。共和国成立を期待していた民衆であったが、1851年11月、ナポレオン3世がクーデターを起こし第二帝政が始まってしまう。1870年9月、プロシアとの戦争のさなかナポレオン3世は捕虜となり第二帝政が崩壊し、その後史上初の社会主義政権であるパリ・コミューンの乱を経て、第三共和政が成立した。以上のように19世紀フランス社会では激しい政治体制の変転が起こっていた。この政治体制の変転の中で19世紀フランスでは近代市民社会が成立し現代の私たちが生きているのと同じような社会制度ができあがり個性や独創性が重視される価値観が形成されたとフランス文学者の稲垣・鈴木は述べている（44）。

このようにして19世紀フランス社会では近代市民社会が形成されていった。近代社会初期に生きた19世紀前半の人々は、フランス革命後徐々に成立したこの近代社会にはそれまでの文学表現や哲学の枠組みとは異なる新しい人間観、新しい歴史観、新しい世界観を表現する必要があると考えたとフランス文学者のヴィアールは指摘している（161-162）。ヴィアールはフランス19世紀を「共和国を生み出すための長く、苦痛に満ちた、成功までの道程である」（140）と表現しその上でヴィアールの著書を訳したフランス文学者の小倉は19世紀フランス社会を「移行の時代」（162）と表現する。19世紀フランス社会を生きた誰しもが移行の時代を生きているという認識をもち、その認識に依拠し展開された文学上・芸術上の思潮がロマン主義であると小倉はロマン主義を定義している（162）。移行の時代を生きているという認識から成立したロマン主義は、文学上・芸術上の一大運動だけでなく、「歴史学、社会思想、宗教思想の領域においても新たな模索の潮流となった」（162）と小倉は指摘している。そのためロマン主義は、近代社会にとって幅広い分野で必要不可欠な思潮であったと考えられる。

特にロマン主義文学に焦点を当てると、フランスにおいてロマン主義文学運動が本格化したのは第一帝政後の王政復古期である1820年代からである。しかし当時体制側の王党派であった文学者たちは政治的には保守的な立場で、フランス革命以前の価値観によって社会を統治しようとしていたにもかかわらず、文学においてはこれまでの古典主義に対する思想であるロマン主義を掲げ革新を担ったと稲垣・鈴木が指摘する（46）。つまり体制側の文学者たちは王政復古を達成したといえども、時代がフランス革命以前の体制に逆戻りすることはないと痛感していたと考えられる。そして「文学は社会の表現である」というルイ・ド・ボナルドによる表現を標語とし、文学の改革に乗り出したと小倉は指摘する（13）。

そしてユゴーもロマン主義運動を主導する王党派の文学者の中に含まれていた。ユゴーらが仲間を集めロマン主義文学運動を推進していたグループをセナークルと呼び、このグループにはシャルル・ノディエやバルザックなどの多くの文学者や画家、彫刻家が参加していた。彼らのことをボードレールらのロマン主義と区別しロマン派第1世代と呼ぶ。ロ

マン派第 1 世代は近代国民国家フランスを建設するために、「神話、伝説、英雄の事績、歴史上の出来事などを題材にして、民族や国家といった共同体の共通の意識を表現した長詩」(50-51)である叙事詩、もしくは叙事詩に代わる歴史小説やリアリズム小説を執筆したと稲垣・鈴木は指摘する。これはロマン派第 1 世代が、社会において聖職者的な役割を果たしていたことに起因する。稲垣・鈴木は、フランス文学者のポール・ベニシューによる『幻滅の流派』(1992)を引用し、教会や王権といった 18 世紀における伝統的権威に代わって民衆を導いたという意味でロマン派第 1 世代には聖職者的役割があったと説明する(54)。そしてユゴーはこのロマン派第 1 世代の主導者として世に知られている。

19 世紀フランス社会は、共和派勢力と王党派勢力の対立の時代であった。最終的に共和国を生み出すための移行期間である 19 世紀フランス社会に成立したロマン主義という思潮は、現代につながる新しい人間観や歴史観や価値観を人々に提供した。ユゴーは特にロマン派第 1 世代を主導し聖職者的な役割を果たしていたことから社会に大きな影響を与えていたと考えられる。そこで次節ではユゴーが社会に果たした役割と彼が著した作品を中心に、ユゴーの生涯と彼の思想について考察していく。

1-2 作者ユゴーについて

前節で 19 世紀は近代社会が成立した時代であり、その近代社会を構成する思潮としてロマン主義が挙げられることを論じた。そしてユゴーはフランスにおけるロマン主義運動を主導した人物であった。それをふまえて本節では、ユゴーの作品を考察するうえで必要となり得るユゴーの生涯と彼の思想についてより詳細に論じる。そしてユゴーが社会に果たした役割を明らかにしていく。

ユゴーは 1802 年 2 月 16 日、フランシュ・コンテ地方のブザンソンで軍人一族の父ジョゼフ＝レオポール＝シジスベール・ユゴーと母ソフィー・トレビュシェの間に生まれた。ユゴーの父はナポレオン軍の軍人で数々の武勲を立てたが母は王党派であり、ユゴーの両親は思想の不一致もあり不仲であった。最終的にユゴーの両親は離婚するが軍人であった父の任地が目まぐるしく変わっていたため両親はそもそもほとんど同居していなかった。つまりユゴーは王党派の母親に育てられた。そのためユゴーは母親の思想の影響を大きく受けた。この王党派の母親の影響を受けてユゴーは詩作を始めるようになった。ユゴーが著した王党派の作品の一例としてフランス文学者の辻が、1816 年にユゴーが 14 歳の時著した「悲劇『イルタメース』では、エジプトの国王が王位篡奪者に打ち勝つさまを述べ、これになぞらえてルイ十八世の復位とナポレオンの没落を祝っている」(43)と指摘しているように、このころのユゴーは母親の政治的意見に同意しておりフランス革命と帝政を憎んでいた。そして 1817 年ユゴーは 15 歳という若さで王党派の詩人としてついに文壇にデビューし、1822 年 20 歳で処女詩集『オードと雑詠集』を公刊した。そして 1827 年から 19 世紀以来の古典主義に対抗する新しい文学運動であるロマン派の会を自宅で主催し、「ロマン主義とは文学における自由主義である」(45)と宣言してその指導者になったとフラン

ス文学者の西永は指摘する。これは『クロムウェル』(1827)という劇の序文で宣言された。ユゴーが『クロムウェル』の序文で「悲劇、喜劇をはっきり分けろと説いたフランス古典派の考えかたはまったく誤りである」(66-67)と述べていると辻が指摘しているように、ユゴーはこの作品から規則が多く制約が多いこれまでの古典主義とは異なり自由な創作を心がけた。この『クロムウェル』の序文は、フランスにおけるロマン主義文学運動の基本理念と方針を掲げるものとして文学史上知られているが、この作品が実際に上演されることはなかった。

1830年、28歳のときユゴーはついにロマン派劇『エルナニ』を上演した。この『エルナニ』上演に際して俗に言う「エルナニ合戦」が起こる。この合戦は『エルナニ』上演中の古典派の野次による非難とロマン派の拍手による称讃の応戦のことを指すが、1830年2月25日の初演から6月22日まで36回にもわたり『エルナニ』の上演を成功させたロマン派側に軍配が上がる。つまり『エルナニ』からロマン主義の時代が到来したといえる。その後も数々のロマン派劇を上演していったユゴーは文壇の中で絶対的な地位を確立していくことになる。また同時にユゴーは1830年ごろから死刑廃止に取り組み始め、以後活発な社会運動を展開した。1830年は七月革命が勃発した年であるが、このころユゴーは国王の長子であり民主主義的な思想の持主であったオルレアン公と交流を持ち始めた。そしてユゴーはそのオルレアン公の影響により民主主義的な思想をもつようになり、政界進出の野望を抱くようになった。国王ルイ＝フィリップの長男の嫁であるオルレアン侯爵夫人の信任が厚く、ユゴーは夫人の後援を得てついに1845年、43歳の時に貴族院議員に選ばれたのを足がかりに政界に進出する。政治家となった反面、1843年以降1つも作品を発表していないが、これは1843年に41歳の時にユゴーの娘が亡くなったこと、また同じ年に戯曲『城主』の失敗に落胆したことなどが原因であった。そして辻はこの時期に原作小説『レ・ミゼラブル』の構想を練り始めていたと述べている(110)が、原作小説を分析する上で重要な位置を占めるこの執筆過程については次章で詳しく述べる。そして政治家ユゴーは自由主義者を自称していたナポレオン3世を支持するようになるが、次第にナポレオン3世がユゴーと全く異なる思想の持主であったことに気づきナポレオン3世を非難する姿勢へと変化していく。

1851年、ユゴーが49歳の時ナポレオン3世がクーデターを起こし政権を奪取すると、ユゴーはこれに反対し左派議員たちと抵抗運動を組織した。しかし9日間の闘争もむなしく運動は壊滅し、ユゴーはベルギーに亡命することになる。そしてユゴーはベルギーのブリュッセルから英仏海峡のジャージー島、そしてその隣のガーンジー島へと移り住みながら、ナポレオン3世を攻撃する出版活動を精力的に続けた。特に1853年、ユゴーが51歳の時に著した『懲罰詩集』でユゴーはナポレオン3世への怒りを爆発させていると辻は指摘している(130)。また1853年はユゴーがジラルダン夫人という女性から日本のこっくりさんと似た交霊術を教わった年でもある。そして辻は、この交霊術によりユゴーは自身の宗教哲学を完成させたと指摘する(132)。このユゴーの宗教哲学は『静観詩集』(1856)や

『諸世紀の伝説』(1859)、さらには『レ・ミゼラブル』(1862)といったユゴーの代表作につながる重要な思想となった。その一方でユゴーは、イタリアの統一運動をはじめ西欧諸国の民族自決運動、アメリカの奴隷解放運動など各国の社会改革運動を積極的に支援し、ヨーロッパ中に影響を及ぼした。

1870年9月、ユゴーが63歳の時ユゴーは第二帝政が崩壊して初めてフランスに帰国する。その後ユゴーは第三共和政下で、「民主主義のカリスマ的なシンボル」(1991, 2)と稲垣が表現するようにフランスだけでなく西欧諸国の崇敬を集めて国民的英雄さらには国際的英雄となった。そして1885年、83歳で生涯に幕を閉じた。

ユゴーの生涯と彼の代表作についてから稲垣が指摘しているように、19世紀フランス社会の歴史の中にユゴーの生涯を重ね合わせてみると、七月革命の1830年、クーデターにより第二帝政が開始した1851年、第二帝政崩壊の1870年と、歴史の節目にユゴーの生涯の節目がぴったり一致している(1998, 16)。この点からユゴーは、辻の表現を借りると19世紀フランス社会を体現する「朗々たるこだま」(208)であったといえる。朗々たるこだまとしてユゴーは時代に合わせて政治的立場を何度も変更している。ユゴーは実際に自身で1850年代のものと推定される未定稿で次のように自分の政治的立場の変遷を振り返っていると稲垣は指摘する(1991, 229)。

1818年—王党派

1824年—王党派・自由主義者

1827年—自由主義者

1828年—自由主義者・社会主義者

1830年—自由主義者・社会主義者・民主主義者

1849年—自由主義者・社会主義者・民主主義者・共和主義者

ユゴーは最終的に共和主義者であると自覚するわけであるが、ここにも19世紀フランス社会を体現しているような政治的変遷を認めることができる。

以上のようにユゴーは19世紀フランス社会において、あるときは詩人として、劇作家として、またある時は政治家として、社会運動家として幅広い分野で活躍していた。詩人や劇作家などの文学者としてユゴーはロマン主義運動を主導し多くの作品を著わしていく。特にユゴーが自身の宗教哲学を完成させた後に執筆した『静観詩集』(1856)や『レ・ミゼラブル』(1862)などはユゴーの代表作となる。また、政治家としてのユゴーは共和主義を推奨したという大きな役割を果たしていた。ユゴーは19世紀フランス社会の朗々たるこだまとしての役割を全うしたのである。

これまで本章では原作小説の舞台である19世紀フランス社会の歴史と作者ユゴーの生涯について論じてきた。19世紀フランス社会は近代社会を成立させるための移行の時代であり、そしてその近代社会を建設するための思潮としてロマン主義思潮が流行した。そのよ

うな時代の中ユゴーは劇の分野で古典主義を完全に打ち負かし、ロマン主義を主導する者の 1 人となった。その後ユゴーは文学者としてだけでなく、政治家としても活躍するようになる。原作小説『レ・ミゼラブル』はユゴーが宗教哲学を完成させ、共和主義者として自覚した後に書かれた作品である。つまりユゴーの思想が多く詰め込まれた作品であるといえる。そこで次章ではユゴーが原作小説で何を描いたかを明らかにしていく。

2. 原作小説について

本章では英語版ミュージカルとの相違点を明らかにするために、ミュージカル作品の原作である原作小説『レ・ミゼラブル』について論じる。前章で原作小説の舞台である19世紀フランス社会が近代社会の建設に向けての激動の時代であったと確認し、激動の時代の中で原作小説『レ・ミゼラブル』はユゴーが自身の宗教哲学と政治的思想を完成させた後に作られた作品であると述べた。その作品を本章では、執筆課程、西永が呼ぶところの「哲学的部分」(23)、登場人物という3つの観点から分析し、原作小説とはどのような作品であったのかを論じていく。

2-1 執筆課程から見る原作の特徴

本節では、ユゴーの生涯と原作小説の執筆課程を重ね合わせながら、ユゴーが原作小説を通して読者に伝えたかったことを考察していく。そこで原作小説について論じる前に原作小説のあらすじを示しておく。原作小説は、第1部「ファンチヌ」、第2部「コゼット」、第3部「マリユス」、第4部「プリュメ通りの牧歌とサン・ドニ通りの叙事詩」、第5部「ジャン・ヴァルジャン」の5部から成立している。さらに部分けされたものが章分けされ、またその章が「1 ミリエル氏」のようにタイトル付けされている(以下本論文では、第何部第何章第何編のような形で表すことにする)。

姉の子供を助けるため貧困に耐え切れずたった1つのパンを盗んだ罪と4度の脱獄の罪によりトゥーロンの徒刑場で19年間服役し社会を憎んでいたジャン・ヴァルジャンは1815年10月のある日、ディーニュのミリエル司教の館を訪れ司教に温かく受け入れられた。しかしその夜、ヴァルジャンは司教が大切にしていた銀の食器を盗んでしまう。翌朝ヴァルジャンを捕らえた憲兵に対して司教は、銀の食器は私が与えたものだと告げてヴァルジャンを放免させたうえに、銀の食器だけではなく司教の唯一の贅品であった2本の銀の燭台をもヴァルジャンに差し出す。聖人的な司教にヴァルジャンは自らを恥じたが、サヴォワの少年プティ・ジェルヴェの持っていた銀貨40スーを奪ってしまう。このことを反省し後悔したヴァルジャンは正直な人間として生きていくことを誓う。

1819年には、ヴァルジャンはモントルイユ＝シュル＝メールでマドレーヌと名乗り工場主として成功をおさめ、ついに街の市長となっていた。彼の営む工場ではファンチヌというひとりの女性が働いていた。彼女には夫がなかったが3歳になる娘コゼットがおり、その娘をモンフェルメイユのテナルディエ夫妻に預けていたため、ファンチヌは毎月高額な養育費を夫妻に送らなければならなかった。しかし子供がいるとばれたファンチヌは工場を罷免され売春婦とならなければいけなくなる。ある日ファンチヌはある口論がきっかけで警官ジャヴェールに逮捕されそうになっているところをヴァルジャンに救われた。ヴァルジャンの工場に勤めており自分のせいで罷免され病に倒れた彼女の窮状を知ったヴァルジャンは、娘コゼットをファンチヌの元に連れて帰ることを約束する。だが、ヴァルジャンがコゼットのいるモンフェルメイユへ行こうとした矢先、自分と間違えられ

て逮捕された男シャンマティユーのことを宿敵ジャヴェールから聞かされる。ヴァルジャンは葛藤の末シャンマティユーを救うことを優先し自身の正体を世間に公表した。結果として、プティ・ジェルヴェから金 40 スーを盗んだ罪でヴァルジャンは再びジャヴェールに逮捕されてしまう。ヴァルジャンは終身徒刑の判決を受けて監獄へ向かうことになるが、途中、軍艦オリオン号から落ちそうになった水兵を助け、海に転落し偶然脱獄に成功した。

そして 1823 年のクリスマス・イヴの夜、ファンチーヌとの約束を果たすためモンフェルメイユにやって来たヴァルジャンはコゼットに出会う。当時コゼットは 8 歳であったにも関わらず、テナルディエ夫妻の営む宿屋で女中として働かされていた。その上コゼットは夫妻から虐待され、夫妻の娘たちからも仲間外れにされていた。ヴァルジャンは静かな怒りをおぼえ、夫妻の要求どおり 1500 フランを支払うことでコゼット奪還に成功し、コゼットを連れてパリへ逃亡する。パリに赴任していたジャヴェールら警察の追っ手をかいくぐり、以前馬車の下敷きになっていたところをヴァルジャンが助けたフォーシュルヴァン爺さんの協力を得た 2 人は、ル・プティ・ピクピュス修道院で暮らし始める。コゼットは、ヴァルジャンを父としてまた友達として心の底から慕い愛し続け、一方ヴァルジャンもコゼットを娘として彼女に愛を注ぎ続けることになる。フォーシュルヴァン爺さんの没後、パリのプリュメ通りにある邸宅に落ち着いたヴァルジャンとコゼットはよくリュクサンブール公園を散歩していた。そのふたりの姿を共和派の秘密結社 ABC (ア・ベ・セー) の友の会に所属する貧乏な弁護士であったマリユス・ポンメルシーが見ていた。彼は、ブルジョワ階級出身で幼い頃に母を亡くし母方の祖父ジルノルマンに育てられた。しかしマリユスは 17 歳のときナポレオンのもとで働いていた父の死がきっかけでナポレオン主義に傾倒したため、王政復古賛成派の祖父と対立し家出していた。マリユスはコゼットに一目惚れしてしまう。テナルディエの長女エポニーヌの助けを得て、マリユスはコゼットの住まいを見つけ同じく彼に惚れていたコゼットにようやく出逢うことができた。この出逢い以降、マリユスとコゼットは互いを深く愛し合うようになるが 1832 年 6 月 3 日、コゼットはヴァルジャンからイギリスへ渡ることを聞かされる。ふたりの恋路は突然ふさがれてしまう。

1832 年、共和派のラマルク将軍の死を合図に学生たちは革命を実行することを決心する。学生たちの立てこもるバリケードにはジャヴェール警部がスパイとして侵入するが孤児ガヴローシュによって正体が暴かれてしまう。民衆の援軍がないまま学生たちは孤立し、激しい銃撃戦の末次々と戦死してしまう。そのさなかヴァルジャンはコゼットのためにマリユスを戦場から救出する。脱出の道中、ヴァルジャンはジャヴェール警部と鉢合わせするが、ヴァルジャンの気迫に負けたジャヴェール警部は、自らが信じる法を裏切りヴァルジャンを見逃した責任から自殺する。ヴァルジャンに助けられたマリユスは、コゼットと婚約しヴァルジャンから真実を聞かされヴァルジャンを軽蔑するようになる。しかしマリユスとコゼットの結婚式当日、テナルディエからマリユスをバリケードから救ったのはヴァルジャンだと聞かされたマリユスはヴァルジャンを軽蔑した自分を恥じる。そこでコゼットをヴァルジャンのもとに連れていき、ヴァルジャンの最後に立ち合わせる。マリユスと

コゼットに見つめられながらヴァルジャンは生涯に幕を閉じる。

以上が物語の説明である。ユゴーがこの物語を制作しようとしたのは 1828、9 年あたりのことである。先ほど本論文第 1 章第 2 節でユゴーの生涯について論じた際に 1843 年以後長らくの間ユゴーが作品を発表していないことを指摘したが、この作品未発表の時期にユゴーは原作小説『レ・ミゼラブル』の初稿である『レ・ミゼール』を書いていたことになる。そして稲垣は、ルネ・ジュールネとギ・ロベールによる原作小説『レ・ミゼラブル』の草稿研究である『「レ・ミゼラブル」の自筆原稿』（1963）から引用して原作小説の執筆過程を次の 5 段階に分けている（2007, 19）。

- 第一段階 ～1845.11.17 : 原稿執筆開始以前
- 第二段階 1845.11.17～1848.2.21 : 『レ・ミゼール』のタイトルで総称される、第 4 部までの亡命以前の原稿執筆
- 第三段階 1860.4.26～1860.12.30 : 『レ・ミゼール』の修正と最初の加筆
- 第四段階 1860.12.30～1861.6.30 : 第 5 部の執筆とそれ以外の加筆
- 第五段階 1861.9.16～1862.5.19 : 最終段階の加筆・訂正

それぞれの段階でどこまで原作小説『レ・ミゼラブル』が執筆されたかは以上の通りである。本論文では、稲垣のこの 5 段階に沿ってより詳しく執筆課程を明らかにしていく。

原稿執筆以前にあたる第一段階でユゴーは原作小説の先駆的作品を 2 つ著している。1 つは死刑制度に対する反対を表現した『死刑囚最後の日』（1829）で、もう 1 つは有能で不幸な労働者の姿を描いた『クロード・グー』（1834）である。辻は、ユゴーが『死刑囚最後の日』で自身の死刑反対の意見を述べており、ユゴーの人道主義的な態度を認めることができると述べている（70）。そしてユゴーは『死刑囚最後の日』で原作小説『レ・ミゼラブル』の主人公であるジャン・ヴァルジャンを思わせるような登場人物を描いた。このように、ユゴーは社会的に虐げられた人々への関心を若いうちからもち心をいためていた。また「1830 年から始まる七月王政期はロマン派の文学者たちが、自由主義、人道主義への前進をおこなった時代でもあった」（110）と辻が指摘しているように、ロマン派の先導者であったユゴーも人道主義的な思想を受容していたことがわかる。よって原作小説はユゴーの人道主義的思想から作られた作品の 1 つであるといえる。

第二段階の始めである 1845 年からユゴーは原作小説『レ・ミゼラブル』の前身となる『レ・ミゼール』に着手し、1848 年まではほかの仕事にあまり手をつけないほどこの作品に打ち込んでいた。第二段階では現在の原作小説『レ・ミゼラブル』の第 4 部第 15 章第 1 編のコゼットのマリウスに対する気持ちを知ったヴァルジャンがバリケードに向かう部分まで書き終える。上記の稲垣による執筆課程を見ると、第二段階と第三段階の間に 12 年間もの執筆の中断が認められる。執筆課程の第二段階の終わりである 1848 年といえば二月革命が起こった年であり、そのころのユゴーといえば政治家として駆け出しで、ユゴーはそ

のまま政治家として二月革命に巻き込まれていくのであった。1848年ころの政治家としてのユゴーの思想は自由主義者・社会主義者・民主主義者であったが、ユゴーはオルレアン侯爵夫人の信任により政治家になったためオルレアン侯爵夫人の摂政制を支持し、立場的には保守派であった。そのため二月革命には保守的な態度をとっていた。またユゴーは先程も述べた通り人道主義者であり、暴力的な民衆の反乱に同意できなかったこともユゴーの二月革命への保守的な態度につながっている。しかしユゴーの保守的な態度もむなしく、二月革命は起こってしまう。この革命後、ユゴーに接近してきた人物が自由主義を主張していたナポレオン 3 世であった。ユゴーには、政策の表面に出ずに権力者の顧問役となって穏健かつ進歩的な政治を行わせたいという政治的な信念があったと辻が主張している(116)ように、自分と同じ自由主義的な思想を有するナポレオン 3 世こそ自分の考えに適合しているとユゴーは考えていた。こうしてナポレオン 3 世を支持するようになったユゴーであったが、ナポレオン 3 世は共和国大統領に当選するとクーデターを起こし第二帝政をしく。一方で 1849 年に立法議会の議員に選ばれてからユゴーは共和主義に向かっていく。ユゴーの 1848 年の出版・言論の自由に対する演説、1849 年以降の貧困についての演説、普通選挙についての演説、ローマ出兵やカトリック教の勢力を教育界に進出させたファルマー法に反対する演説などから共和主義の傾向が見て取れる。そのためユゴーはナポレオン 3 世の態度に猛反発し抵抗運動を組織するが、運動は失敗し亡命することになる。ユゴーは『レ・ミゼール』の原稿を亡命先であるブリュッセルに持ち出したが、この亡命期のユゴーはナポレオン 3 世を徹底的に批判する作品を先にいくつも著した。同時にこれまでユゴーが英雄とみなしていたナポレオンをも批判した。ユゴーは、「非合法のクーデターによって権力を奪取し、帝国を築いたという点」(89)でナポレオンもナポレオン 3 世も同じであるとみなしていたと西永は指摘する。このナポレオンとの決別はユゴーに大きな思想的な変革をもたらした。それが共和主義者であるという自覚である。さらに 1853 年にはジラルダン夫人という女性から日本のこっくりさんと似た交霊術を教わり自身の宗教哲学を完成させた。この原作小説『レ・ミゼラブル』の執筆の中断は、ユゴーが自身の思想を変化させ共和主義者であると自覚した期間だったのである。

亡命先であるイギリスのガーンジー島でユゴーはついに『レ・ミゼール』の再執筆を始めた。題名を『レ・ミゼール (貧困)』から『レ・ミゼラブル (惨めな人々)』と変更したのはこの時期であった。先ほども述べたようにこの時期のユゴーと第一・二段階のユゴーで大きく異なる点は、民衆が主権者として選挙権を行使し政治を決定する共和制をユゴーが支持していた点である。第三段階においてユゴーが原作小説『レ・ミゼラブル』に書き加えたのは、原作小説の第 3 部「マリユス」における「未来のパリの民衆であるガヴローシュらパリの浮浪児たち、マリユスの祖父ジルノルマン、マリユスのよき相談相手でありフランス革命を代表するマブーフ老人」(2007, 23)であると稲垣が指摘するように、政治的思想を含んだ部分を書き加えたことがわかる。つまりユゴーがこれらの部分を共和主義者の視点から書き加えたことによって、原作小説『レ・ミゼラブル』は政治的意図を含んだ作

品となったのである。また、ユゴーはパリの下水道についての歴史的考察にあたる第 5 部第 2 章のいくつかの編も書き加えている。

段四段階では、第二段階で中途半端に終わっていたストーリーをユゴーは最後まで書き終える。すでに書き終えていた部分についても多くの加筆と訂正を加えた後、ユゴーは手帳に「私は『レ・ミゼラブル』をワーテルローの古戦場で、ワーテルローの戦いのあったのと同じ月、今日、1861 年 6 月 30 日午前 8 時 30 分に書き終えた」（2007, 24）と書き付けたと稲垣は指摘している。しかし、第五段階にあたる 1861 年 9 月 16 日からユゴーは再び原作小説『レ・ミゼラブル』の加筆と訂正を行っていく。ワーテルローの戦いについての歴史哲学的考察、下水道についての考察、俗語についての考察に大幅な加筆を加えた。そして、原作小説の全体の構成を見直し、部・章・編へと分割し各々のタイトルを決定した。

このような原作小説『レ・ミゼラブル』の執筆過程をたどってみると、原作小説『レ・ミゼラブル』にはユゴーの思想が大いにつめこまれていることがわかる。ユゴーは死刑制度廃止という人道主義的観点からこの物語を書き始めた。主人公ヴァルジャンが体现しているのは貧困が犯罪を生み刑務所が犯罪者を作り出すという 19 世紀フランス社会に対するユゴーの持論であると西永が指摘する（106）ように、当初の『レ・ミゼール』では 19 世紀フランス社会が作り出した貧困がテーマであった。その後原作小説『レ・ミゼール』はユゴーが共和主義者として自覚し、宗教哲学を完成させた中断期を経る。『レ・ミゼール』から『レ・ミゼラブル』となった原作小説には、それらの思想をもとに多くの加筆がなされた。このユゴーの思想が存分に含まれた中断後に書かれた部分を西永は「哲学的部分」（23）と呼び、哲学的部分こそが原作小説の魅力であると指摘している。次節では、この哲学的部分を詳細に分析していく。

2-2 「哲学的部分」の考察

前節で執筆課程をたどることによって原作小説『レ・ミゼラブル』にはユゴーの思想が存分に含まれた部分である「哲学的部分」があることを明らかにした。この「哲学的部分」の存在こそが原作小説を複雑にしている。そこで本節ではその哲学的部分を論じることによりユゴーの思想を明らかにしたうえで、原作小説の複雑さを証明する。

初めに、哲学的部分であると西永が指摘している箇所についてまとめておく。原作小説の第 1 部（第 1 巻）「ファンチヌ」では、主人公のヴァルジャンが登場するまでミリエル司教の高徳さを示すエピソードが語られている（1 巻,6-111）。そしてその中にはミリエル司教が唯物論者の上院議員（1 巻,54-60）や、国民公会の元議員 G と交わす哲学論、歴史・宗教論（1 巻,68-88）が長々と述べられている。第 2 部（第 2 巻）「コゼット」では、ワーテルローの戦いについて語られている（2 巻,6-97）。さらに、修道院制度や自身の宗教観についても語られている（2 巻,326-405）。第 3 部（第 3 巻）「マリユス」では、パリの浮浪児の生態と歴史が語られている（3 巻,6-41）。第 4 部（第 4 巻）「プリュメ通りの牧歌とサン・ドニ通りの叙事詩」では、王政復古時代の終焉から七月王政の成立にいたる歴史認識と考

察が展開されている（4巻,6-67）。また、下層階級が使用した隠語の由来と社会的意味について論じてられている（4巻,300-342）。そして、1832年6月5日に実際起きた六月蜂起と呼ばれる出来事の歴史的背景が論じられている（4巻,426-464）。この蜂起は原作小説内で起きる蜂起のモデルとなっている。第5部（第5巻）「ジャン・ヴァルジャン」では、パリの地下の下水道の歴史が辿られる（5巻,159-190）。以上が西永が指摘している箇所（5巻,24-25）であるが、隠語から歴史、哲学論さらにはパリの下水道事情まで非常に多岐にわたる問題について哲学的部分では論じられていることがわかる。そして哲学的部分は必ずしもストーリーに関係があるわけではなく、多くが作者であるユゴー自身の言葉として考えが延々と述べられていると西永は指摘している（24-25）。そして西永は哲学的部分を「貧困と社会主義」、「進歩という思想」、「死刑廃止論」、「宗教観」という4つの思想に分けて論じている。まず「貧困と社会主義」では、ユゴーの貧困と社会主義に対する主張が論じられ、「進歩という思想」と「死刑廃止論」では、ユゴーの政治思想に関わる思想が論じられている。そして「宗教観」ではユゴーの宗教観について論じられている。本節では西永による4つのユゴーの思想の分類に従って、原作小説『レ・ミゼラブル』に込められたユゴーの思想を明らかにしていく。

まずはユゴーが貧困と社会主義について述べている部分について論じる。西永が「貧困そのものについては、むろん登場人物たちの描写に赤裸々に叙述されている」（129）と指摘するように、原作小説『レ・ミゼラブル』では登場人物たちによって読者に当時の貧困の様子がより現実的に伝わるようになっていく。ここから原作小説とあらずじがほとんど同じである英語版ミュージカルに当てはまる主題は貧困であると考えられる。しかし西永は、より一層当時の貧困の実相を表す役割を果たしているのがユゴーの隠語論であると指摘している（131）。隠語論は上記の通り原作小説の第4巻のうちの300ページから342ページにもわたって論じられている。ここでユゴーは、貧困について考える際には貧困に苦しんでいる者たちの言語、つまり隠語を考える必要があると主張している。この主張について西永は「外国のことを深く認識するためにその国の言語を学ぶことが大切であるという道理と同じ」（133）であると主張している。ユゴーが原作小説『レ・ミゼラブル』で論じようとした貧困とは国の産業化が生み出した深刻な課題であった。ユゴーはほかの同時代の人と同様、貧困の撲滅が時代の緊急の課題であると認識していた。ユゴーはその貧困の解決策として原作小説『レ・ミゼラブル』の中で社会主義思想を掲げている。本論文の第1章で、1850年の未定稿の中でユゴーは1828年に社会主義者として自覚していたことを指摘したが、社会主義という言葉がフランスに登場するのは1833年になってからである。そのため、西永はユゴーが原作小説『レ・ミゼラブル』で定義づけた社会主義思想とは「たんに「社会問題」に真摯な関心を寄せ、何らかの解決を見いだしたいと願う者、すなわちいまもフランスでいう「左翼」（139）的な思想であると指摘している。その理由として原作小説『レ・ミゼラブル』には社会主義による具体的な政策が示されていないことを指摘している。ここにユゴーの思想があくまでも理想的であることが認められれば非難さ

れるところとなっている。

次に進歩についての思想について論じていく。ユゴーは原作小説の中で進歩という思想を 1832 年の蜂起を正当化するために用いていると散文小説の研究家であるウェールズは述べている (17)。そしてユゴーは原作小説の中で進歩について次のように記している。

私が今語っているような戦闘は、理想への痙攣にほかならない。われわれは、進歩の病気、つまり内乱に、話の途中で出会わねばならなかった。それは、社会的断罪を受けた一人の男を軸とするドラマの、進行中でもあり、幕間でもある、宿命的な段階である。そのドラマの真の題名は、「進歩」である

進歩！

わたしがしばしば発するこの叫びが、私の全思想である。そして、ドラマがここまできた以上、そこに含まれる概念は、まだこれから幾つもの試煉を受けなければならない。そのベールをあげることは許されなくとも、少なくとも、その光をはっきり透かして見せることは、たぶん許されるであろう。

今読者が読んでいる本は、端から端まで、全体的にも、部分的にも、中断、例外、欠陥があるにしても、すべて悪から善への、不正から正義への、虚偽から真実への、夜から昼への、欲望から良心への、腐敗から生命への、獣性から義務への、地獄から天国への、虚無から神への前進である。出発点は物質、到達点は魂である。初めの怪物は、終りでは天使となる。(5 巻, 135-136)

この引用部から、ユゴーが「進歩」すなわち人間生活の物質的および精神的な向上こそが『レ・ミゼラブル』の真の主題であり、彼自身の「全思想」だと考えている (156) ことがわかると西永は指摘する。このような人間の精神が時代とともに成長し、また歴史も時代を追って完成に向かうという思想は、18 世紀の啓蒙思想より始まった西洋の進歩思想と一致すると西永は述べる (158)。しかし西永は進歩によって現在ではユゴーが原作小説『レ・ミゼラブル』で主題とした貧困も規模を拡大したことを指摘し、ユゴーの進歩思想が楽観的であることを述べている (161)。

3 つ目は死刑廃止論についてであるが、これは前節でも触れた通り原作小説『レ・ミゼラブル』以前のユゴーのいくつかの作品にも見られるユゴーの思想である。よって死刑廃止論は政治思想が変転するユゴーの一貫した思想であった。

最後に宗教観について論じる。原作小説はヴァルジャンがキリスト教的考えに従って更生し神のような大往生を遂げるという話であるが、1864 年から 1962 年の第 2 ヴァチカン公会議までのほぼ 100 年間は教会の禁書リストに名を連ねていた。その理由にはユゴーの宗教観が大きく関係している。西永は、ユゴーは神の存在を信じていたが教義や教権主義については批判し、原作小説『レ・ミゼラブル』で修道院制度と教会組織そのものを徹底的に批判していると指摘する (180-182)。つまり、原作小説『レ・ミゼラブル』の主人公

に適応された物語にはユゴー独自の神の考え方が反映されていると考えられる。このユゴーの神への態度について、辻は 1853 年ころジラルダン夫人から教わった交霊術や、神秘学を学んだこと、さらには靈魂の存在を信じたことからユゴーの宗教哲学が確立したと指摘している (132)。そして辻はユゴーの宗教哲学の思想の根幹を、モーリス・ルヴァイヤン、ポール・ベレ、ドニ・ソーラを参考にして以上のようにまとめている (132-133)。

一、神はこの世界を不完全で相対的なものとして創造した。なぜなら、もし完全なものとして創造すれば、神自身を再製してしまうことになるから。

二、宇宙の万物は、おのおのが保有している〈精神性〉の多少に応じて、段階的な階級を形成しており、神はこの段階の頂点に位置している。人間はこの段階の中央に位置し、その下に動物、その下に植物、さらにその下に石というように配置されている。万物は生物ばかりでなく、無生物までもがすべて、生き、感じ、考える力をもっている。

三、このような万物は、みな自己の犯した罪のために苦しんでいる。しかし、このような苦悩によって、彼らはその罪を償い、この万物の階段を上昇してゆく。そしてついには、神のもとにまでのぼってゆく。この世の悪は、最後には神によって代表される善に融合し、これに同化するのである。

辻はこのようなユゴーの宗教的信念を現在のわれわれでは理解できないとしながらも、ユゴーはこれらの宗教哲学を信じた結果『静観詩集』(1856)、『諸世紀の伝説』(1859、77、83)といった叙事詩の傑作を次々発表し、同時期に完成をみた原作小説『レ・ミゼラブル』にもこの宗教哲学が必要であったと指摘している (133)。思想の完成によって書かれた原作小説は同時期に著された『静観詩集』、『諸世紀の伝説』と同様に叙事詩的な作品として読まれるべきであると辻は指摘している (151)。

原作小説『レ・ミゼラブル』はユゴーの思想が詰め込まれた大作であったが、そのユゴーの思想は観念的で現代の私たちからすれば理解できない部分が多かった。つまり哲学的部分があるからこそ原作小説は複雑で、あまり読まれない作品となってしまったのである。

2-3 登場人物の分析

本節では、登場人物を分析する。原作小説では登場人物は 100 名を超え、主要な人物のみならずその他の人物の生い立ち、容貌、性格まで丁寧に描き出されており、作品世界を多重、多彩にしている。本節では、原作小説だけでなく英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』にも登場するキャラクターに絞って分析していく

始めに主人公ジャン・ヴァルジャンについて論じる。ヴァルジャンは 1769 年にブリ地方のファヴロルで生まれた枝打ち職人だったが、25 歳の時ヴァルジャンの姉の夫が死に、寡婦になった姉と姉の七人の子供の面倒を見なければならなかった。ヴァルジャンは、貧困

のために飢えた姉の子供たちのためにパン屋からパンを盗もうとして捕まり徒刑場送りとなってしまった。ヴァルジャンはトゥーロンの徒刑場で 5 回脱走未遂を繰り返すうちに、当初 5 年だった刑期は 19 年に膨らみ、刑期を終えたときには 46 歳になっていた。服役中、自らの罪と罰の均衡が罰のほうに不当に重くかかりすぎていると何度も思い、このような不当・不正な法律を作った人間社会、これを放置する神意まで憎悪するようになった。このような人物であるヴァルジャンを考察する前に、原作小説の冒頭の文章について述べておく。「1815 年のこと、シャルル＝フランソワ＝ビヤンヴニュ・ミリエル氏は、ディーニュの司教だった」(1 巻, 6) という冒頭の文章について、稲垣は本論文第 2 章第 1 節で用いた R・ジュールネと G・ロベールの執筆課程の研究を用い、ユゴーが『レ・ミゼール』として原作小説を書き始めたときには「1815 年 10 月の初めのころ、日の落ちる 1 時間ほど前に、歩いて旅をしていた一人の男が、小さな町ディーニュに入って来た」(1 巻, 112) となっていたことを述べ、執筆中断をまたいでなお原作小説『レ・ミゼラブル』で 1815 年から物語を書き始めたかったようだと考察している (2007, 42)。1815 年とはワーテルローの戦いが起きた年である。本論文第 2 章第 1 節で指摘したように、ユゴーは執筆課程の第四段階でワーテルローの古戦場で執筆を終えたことを記している。また第五段階でワーテルローについての歴史哲学的考察を加筆し、その中でユゴーはワーテルローの戦いについて「この日、人類の展望は変化した。ワーテルローは 19 世紀の肱金である。あの偉人の消滅は、偉大な世紀の到来に必要なものだ。」(2 巻, 72) と述べている。つまりユゴーにとってワーテルローの戦いがあった 1815 年こそが 19 世紀の始まりであった。さらにユゴーは第 1 巻 113 ページでヴァルジャンがディーニュに入ってきた道を「ナポレオン皇帝がカンヌからパリへとのおぼって行ったときと同じ道を通して」と記述している。ユゴーがこのような記述したのは、ナポレオンとヴァルジャンの類似性を指摘するためであったと稲垣は主張する (2007, 43)。

ヴァルジャンとナポレオンは共に 1769 年に生まれる。そして共に 1796 年という同じ年に運命の岐路を迎える。1796 年、ナポレオンはイタリア遠征軍総司令官としてはなばなしい戦功を収め、以後 19 年におよぶ活躍のきっかけを作った。一方、ヴァルジャンは 1796 年にパン 1 つによる窃盗の有罪判決を受け、19 年にわたる徒刑場での苦難の生活を始めた。稲垣は、ユゴーはこのように相対する運命をたどったふたりを 19 年後の 1815 年にディーニュの町ですれ違いさせ、運命を入れ替えさせたと指摘する (2007, 43-44)。そしてヴァルジャンと運命を入れ替えるべくディーニュの町を通った後、ナポレオンはワーテルローの敗戦を契機として没落する。つまりユゴーはフランス近代社会の歴史が開かれる 1815 年から物語を始めることによって、ナポレオンと運命を入れ替えたヴァルジャンを使って 19 世紀という時代を原作小説のなかで再構築しようとしていると稲垣は指摘する (2007, 44)。

またヴァルジャンはユゴーによって意図的に何度もイエス・キリストに例えられあかかも殉教者のように描かれていると西永は指摘する (122)。ユゴーの宗教観は神の存在は信じているが修道院制度といった教会組織そのものを批判しているものだったが、ユゴーは

イエス・キリストについては歴史的な聖なる人物としていくつもの作品に登場させている。貧困のあまり 1 つのパンを盗み損ねたという罪とも言えない罪のため社会から迫害され、ひたすら苦難と試練、贖罪と自己犠牲の連続である人生を送るヴァルジャンは、最後には必ず自らの良心、つまり神にしたがって自己決定している。つまりヴァルジャンにはイエス・キリストのような聖性が与えられていると西永は説明し、ユゴーはヴァルジャンを十九世紀のキリストの肖像として描いていると指摘する (122)。つまり西永が指摘するようにユゴーは原作小説『レ・ミゼラブル』で、ワーテルローの戦い後の軍事・政治的な偉人ナポレオンが退場したあと、それを引き継ぐように同い年でまったく非政治的だが人間的・倫理的にすぐれた義人であるヴァルジャンを登場させ、ナポレオンを批判すると共に理想的な 19 世紀フランス社会を建設しようとしたと考えられる (125)。

そしてヴァルジャンの思想を引き継ぐのがマリユスであり、マリユスはユゴーがモデルであると稲垣は主張する (2007, 149)。マリユスとコゼットの結婚式が行われるのは 1833 年 2 月 16 日の告解火曜日であると物語の中では設定されているが、これは歴史的事実と反している。原作小説第 5 巻の 343 ページで、「1833 年 2 月 16 日から 17 日にかけての夜は、祝福された夜だった。夜がその影の上に、ひらかれた空をいでいていた。マリユスとコゼットの婚礼の夜だった」とされているが、この 2 月 16 日はユゴーと彼の愛人のジュリエット・ドルーエが最初に結ばれた夜であると稲垣は指摘する (2007, 149)。ユゴーとジュリエットは、1833 年 5 月にジュリエットが亡くなるまで 50 年と 3 ヶ月の間愛人関係にあった。このユゴーの生涯の記念日にマリユスとコゼットを結婚させるということは、ユゴーが自分自身を新郎のマリユスに投影していることを意味する。

さらにユゴーは、自分自身の人生の重要な部分をマリユスに託していると稲垣は主張する (2007, 149)。本論文第 1 章で 1824 年から 1830 年にかけてユゴーが王党派から民主主義者になったという変遷をたどったが、この変遷の裏にはナポレオンと父に対するユゴーの姿勢の変化が見られる。1 章でも述べたようにユゴーの両親は夫婦仲が悪く、父は軍務のために常時フランスから離れて暮らしていたため父不在のまま母に育てられた。王党派の母の影響もとユゴーは王党派として育ち、王党派と敵対関係にあったナポレオン、そしてナポレオンの手下である父のことを嫌っていた。しかし、母親の死後 1823 年から父と頻繁に交流をもつようになり、ユゴーは父の人柄に初めて触れて敬愛の念を抱きそれと同時に父親が崇拜していたナポレオンをユゴーも評価するようになった。ユゴーと同じように原作小説の中でマリユスは母親の死後、母方の祖父で王党派のジルノルマンの意向で父親から引き離されてジルノルマンに養育された。マリユスはジルノルマンの影響で王党派にくみし、ナポレオンとその手下の軍人であったマリユスの父であるポンメルシーを嫌っていた。ポンメルシーが 1827 年に病死した後 1828 年になってポンメルシーがいかにマリユス自身のことを愛していたか気づいたマリユスは父を敬愛し始め、ナポレオンをフランス革命の後継者として崇拜し始める。このように、ユゴーは自身の変化をマリユスにも起こし、ヴァルジャンから社会改革の仕事を引き継いだマリユスが原作小説『レ・ミゼラブル』執筆

当時のユゴー自身を体現していると稲垣は主張する (2007, 154)。つまりフランス革命からナポレオンが引き継ぎ、ナポレオンからジャン・ヴァルジャンが引き継いだ社会改革の事業をさらに引き継いだのはマリユス、つまりユゴー自身であると考えられる。

キリスト化したヴァルジャンに救済される人物がファンチーヌとその娘コゼットである。そしてファンチーヌはユゴーの実体験を下に創造されたキャラクターである。ユゴーは、『私の見聞録』内でファンチーヌのモデルとなった娼婦の女性を救った 1841 年の体験談を記している。

...ふと見ると、金のかかった派手な身なりの若者が腰をかがめ、雪をひとつかみ手でつかんだ。そして、雪の大きな塊を、街角で客引きをしていた女の背中に突っ込んだ。... (中略) ...女はその伊達男に飛びかかり、バタンバタンと叩いた。伊達男が叩きかえし、さらに女が反撃したりしているうちに、けんかはどんどん激しくなった。あまりの騒ぎに、騒ぎを聞きつけた警官たちが駆け付けた。警官たちは男には手を触れず、女につかみかかった。... (中略) ...女の涙など斟酌する素ぶりも見せず、警官たちは女を、オペラ座の裏にあるショーシャ通りの派出所に連行した。(36-38)

このシーンの後、ユゴーが警察署長に事の次第を証言することで娼婦は助かる。この物語は第 1 部第 5 章第 13 編 (356-368) の 1 つの場面となっている。そしてこの体験談に登場する警察署長はジャヴェールとして原作小説に描かれている。このように、社会的に虐げられた人々に対する関心をユゴーがもっており、実体験をもとに『レ・ミゼラブル』のテーマとして貧困の物語を書き始めたことがわかる。そして、貧困というテーマのもとテナルディエ夫妻とその娘エポニーヌ、息子のガヴローシュは貧困に苦しむ 19 世紀フランス社会の最下層の民衆をリアルに表現している。

ファンチーヌの娘コゼットは、虐げられた生活を抜け出し将来はマリユスと結婚するという人生を歩む。これは童話によく見られるようなシンデレラストoryである。このコゼットの挿話があるからこそ原作小説『レ・ミゼラブル』は児童向けの物語としても独立し、子供たちから絶大な支持を得ている。

ヴァルジャンと敵対するように描かれるのがジャヴェールである。ジャヴェールは、法こそがこの世界の正義であるという考えを持っている。絶対的に法に服従しているジャヴェールにとって、法を犯し逃走を続けるヴァルジャンは悪である。しかし、主人公の敵役として描かれているジャヴェールは悪役ではないと辻は指摘する。辻は、タイトル『レ・ミゼラブル』の意味を「恵まれぬ人々」という意味で解釈する。つまり、パン 1 つを盗んだという罪から 19 年間も勾留されていたヴァルジャンも、警察官としての良心と人間としての良心との板挟みになって死を選ぶジャヴェールも、原作小説『レ・ミゼラブル』の登場人物それぞれが時代に奔走されたという意味で恵まれぬあわれな人々を代表していると辻は指摘している (150)。

本節では、原作小説と英語版ミュージカルに共通して登場する人物を分析し、それぞれの登場人物がどのような役割を担っているか論じてきた。主人公であるヴァルジャンは、19世紀フランス社会におけるイエス・キリストとして描かれ、フランスの歴史を築いたナポレオンのバトンを引き継ぐ形で19世紀を創造する人物として描かれている。そして原作小説内でヴァルジャンの思想を引き継ぐマリユスはユゴーがモデルとなっていた。つまり、ナポレオンからジャン・ヴァルジャンが引き継いだ世紀創造のバトンは、ユゴーへと引き継がれていき、原作小説内でユゴーは、19世紀世界の再創造をしていると考えられた。そしてヴァルジャンとマリユス以外の人物は時代に奔走された19世紀フランス社会を生きた民衆を表現している。

本章では執筆課程、ユゴーの思想が存分に含まれた「哲学的部分」、登場人物という3つの観点から原作小説を分析してきた。執筆課程をたどった結果として、原作小説の主題はユゴーの生涯の思想が詰まった哲学的部分に多く含まれていることが明らかになった。それをふまえてその思想が存分に含まれている哲学的部分をユゴーの貧困と社会主義、進歩についての思想、死刑廃止論、宗教という4つのセクションに分け分析したがユゴーの思想には観念的な部分が多くあることが明らかになり、現代のわたしたちでは理解することが困難であることが浮かびあがった。そこで読者を惹きつける登場人物の分析をおこなった。ユゴーが19世紀フランスの産業化に伴い登場した課題である貧困に関して強く関心を持ち、貧困に奔走された19世紀の人々を登場人物で表現していた。そして主人公ジャン・ヴァルジャンとヴァルジャンの意思を引き継ぐマリウスはユゴーが理想とした19世紀フランス社会の主導者であった。以上から、原作小説は貧困という19世紀に登場した解決急務な課題に触発され、ユゴーが生涯を通して蓄えた思想を余すことなく書き上げ理想的なフランス社会を建設しようとした作品であるといえる。次章では理想的な社会の建設を試みた原作小説からどのようにミュージカルが作られ、なぜ現代社会で人気を博しているのかを探究していく。

3. 英語版ミュージカルについて

本章では前章で分析した原作小説と英語版ミュージカルを比較し英語版ミュージカルが人気である理由を探究していく。原作小説と英語版ミュージカルはあらすじがほとんど同じであるため、原作小説からミュージカルへの変遷をたどると原作小説とミュージカルの相違点が明らかになる。本論文第 2 章で原作小説はユゴーの思想が含まれた部分が重要であることを論じた。一方英語版ミュージカルには原作小説の「哲学的部分」が含まれておらず物語が重視されている。そこで本章では原作小説と英語版ミュージカルをより詳しく比較することで人気の理由を探求している。第 1 節では原作小説から英語版ミュージカルが作られる過程を論じ、英語版ミュージカルはどのような作品となったかを明らかにする。また第 2 章では英語版ミュージカルが一般的にどのような評価を受けているかを分析する。そして一般的な評価をふまえて第 3 章で原作小説と英語版ミュージカルを比較し、なぜ英語版ミュージカルが人気となったのかを探究していく。

3-1 制作過程

本節では、ユゴーの思想が詰め込まれた大作である原作小説から英語版ミュージカルがどのように作られたかを論じ、英語版ミュージカルがどのような作品となったかを明らかにする。英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』は 1985 年のロンドン初演から現在までロンドンでロングラン公演を続ける作品で、演劇評論家のナイチンゲールによると、2012 年に公演 27 周年を迎えるまで英語版ミュージカルの上演回数はウエスト・エンドだけで 11,209 回にものぼり、世界では 42 カ国 318 都市で計 48,000 回上演され、アイスランド語、ヘブライ語、クリオール語など 21 カ国語に翻訳されている (6)。そして 1987 年度のトニー賞をはじめとし各国で多くの賞を受賞している作品であり、英語版ミュージカルは世界で最も成功した作品の 1 つであるといえる。英語版ミュージカルの上演時間は休憩時間も含めて 3 時間程度で二幕構成となっている。先ほども述べたように英語版ミュージカルのあらすじは原作とほとんど同じであるといえるため、本論文第 2 章第 1 節を参考にする。ここでは、のちに楽曲について論じるため英語版ミュージカルの曲名と登場人物の誰の歌かということを始めに示しておく。劇団とは登場人物の何人かで歌うことを表す。以下では 1988 年に発売された *Les Misérables Complete Symphonic Recordings* を参考に曲名、登場人物の順に示した。

第一幕

Prologue, 劇団

Soliloquy, ヴァルジャン

At The End Of The Day, 乞食たち、工場労働者

I Dreamed A Dream, ファンチーヌ

Lovely Ladies, 娼婦たち、客

Who Am I? ヴァルジャン
Come To Me, ファンチーヌ、ヴァルジャン
Catsle On A Cloud, コゼット
Master Of The House, テナルディエ夫妻、宿の客
Thénardier Waltz, テナルディエ夫妻、ヴァルジャン
Stars, ジャヴェール
Look Down, ガヴローシュ、乞食たち
Red and Black, アンジョルラス、マリウス、学生たち
Do You Hear The People Sing? アンジョルラス、学生たち、市民たち
I Saw Him Once, コゼット
In My Life, コゼット、ヴァルジャン、マリウス、エポニーヌ
A Heart Full Of Love, コゼット、マリウス、エポニーヌ
One Day More, 劇団

第二幕

On My Own, エポニーヌ
A Little fall Of Rain, エポニーヌ、マリウス
Drink With Me To Days Gone By, グランテール、学生たち、女たち
Bring Him Home, ヴァルジャン
Dog Eats Dog, テナルディエ
Soliloquy, ジャヴェール
Turning, 女たち
Empty Chairs At Empty Tables, マリウス
Wedding Chorale, 招待客
Beggars At The Feast, テナルディエ夫妻
Finale, 劇団

英語版ミュージカルの作詞はフランス人アラン・ブーブリル、作曲はフランス人クロード＝ミッシェル・シェーンベルク、プロデューサーはイギリス人キャメロン・マッキントッシュである。3人は英語版ミュージカル以外にも2つのミュージカル作品『ミス・サイゴン』（1989）、『マルタン・ゲール』（1996）を共作している。3作品ともロンドンのウエスト・エンドから上演された作品である。

ウエスト・エンドとは劇場が密集しているロンドンの一地域であり、ニューヨークのブロードウェイと並ぶミュージカルの隆盛地である。ミュージカルの歴史は古く、演劇研究家の小山内はミュージカルとは「ヨーロッパとアメリカで育ったいくつもの先行芸能の諸要素を取り入れ、大西洋を往還しながら影響を及ぼし合って、徐々にジャンルとして確立

されたものである」(2016, 13)と定義付けている。そしてミュージカルの中でもイギリスのミュージカルは1970年代以降、プロデューサーであり作曲家であるアンドリュー・ロイド＝ウェーバーの作品によって変化の兆しが現れたと演劇評論家のヴァーメットは指摘する(12)。ロイド＝ウェーバーの代表作は、『キャッツ』(1981)、『オペラ座の怪人』(1986)などである。ロイド＝ウェーバーは、現代のオペラでイギリスミュージカル界隆盛のきっかけとなるロック音楽を使用したロック・オペラを提唱した。そしてロイド＝ウェーバーの作曲する曲の特徴を「楽曲の単なるリプリーズではなく、同じ旋律に異なるタイトル・歌詞・編曲を施して別のナンバーに仕立てる」(2016, 151)と小山内は主張する。徐々にこの手法がロンドンのミュージカルの特徴となり、1980年代ブロードウェイにおけるロンドンミュージカルの席捲につながっていく。そしてロイド＝ウェーバーと同じように、全編を歌で綴り音楽で物語を語る作品を制作したのがシェーンベルクとブーブリルであった。つまり英語版『レ・ミゼラブル』が上演された1985年ころ、ウエスト・エンド発祥のミュージカルが隆盛期であったのは、ロイド＝ウェーバーによってイギリスのミュージカルが変化しシェーンベルクとブーブリルがロイド＝ウェーバーのミュージカルを引き継いだからであった。その点で、ミュージカル『レ・ミゼラブル』はイギリスミュージカルに変化をもたらした作品であるといえる。

イギリスミュージカルに変化をもたらした英語版ミュージカルの共同作詞作曲家であるブーブリルとシェーンベルクは共に第二次世界大戦中、ユダヤ人移民の家族に生まれたフランス人である。ヴァーメットは、彼らのミュージカルに共通する重要なテーマは人が自ら望んで選択した運命を意志をもって進み、自分が何者かという問いかけに答えていくものだと指摘する(17)。このテーマは、彼らがある程度政治情勢に左右されながら成長したことに起因する。彼らにはミュージカルを作り始めた当初から歴史的な群像をミュージカル化する意欲があったことが彼らの当初の作品『フランス革命』(1973)から見てとれる。『フランス革命』は、フランス革命の時系列に沿って革命に翻弄される民衆の姿を描いた作品でありフランスで上演された。しかし『フランス革命』は時系列に沿っただけの物語であったためミュージカルとしての評判は芳しくなかった。

英語版ミュージカルは、ブーブリルとシェーンベルクが作ったフランス語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』を、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(以下RSCと表記する)が練り直し、曲を追加し、構成を大幅に変えたものである。マッキントッシュが作家のエドワード・ベアに”It was an instant combustible decision, by the fourth track I was widely excited”(62)と語っているように、『キャッツ』や『オペラ座の怪人』を成功させていたマッキントッシュにとってフランス語版『レ・ミゼラブル』の音楽はそれらの作品と同じように成功する可能性があると感じられる作品だったのである。しかし1980年にパリで初演されたフランス語版ミュージカルは、「原作小説でよく知られる挿話や名場面を羅列しただけの単線的な名曲のオンパレードであった」(2007, 66)と小山内が指摘しているように、フランス語版ミュージカルと現在の英語版ミュージカルとは全く異なるものであ

った。そこで RSC 演出家のトレヴァー・ナンと脚色・演出家のジョン・ケアードによって英語版ミュージカルを製作するにあたりブーブリルの非凡な才能が発揮された曲を残しつつ、原作を知らない観客にもわかりやすいような変更を施したと小山内は論じている(2007, 66-67)。さらにブーブリルがフランス語で作詞した歌詞を英語に直した作詞家のハーバート・クレッツマーの果たした役割も大きい。これらの変更点こそ英語版ミュージカルが人気となった理由であると考えられる。以下ではフランス語版から英語版への変更点を分析するために小山内(2007, 66-75)と演劇評論家の渡邊の論文(2002, 82-87)を参考にまとめた。

1 つ目の変更点はプロローグを追加したことである。フランス語版ミュージカルでは、1821年のモントルイユ・シュルメールの工場から始まっていた。しかしパン一斤を盗んで投獄されたジャン・ヴァルジャンの仮釈放と逃走、一夜のベッドと食事を与えてくれた教会からの銀器盗難という物語の鍵となる1815年の場面をプロローグとして英語版ミュージカルに追加したことにより、原作小説を国民文学ほど親しんでいない他国の観客に物語の背景を示すことに成功した。

2 つ目の変更点は、代表曲である *On my own* の位置づけを変更したことである。現在 *On my own* はマリウスへの片思いが叶わないエポニーヌが歌う曲である。これに対してフランス語版ミュージカルでは *On my own* を惨めなテーマソングとして反復していたが、物語前半で姿を消すファンチーヌに関わる曲という位置づけであったため、作品の主題であるレ・ミゼラブル(惨めな人々)の対象がファンチーヌに偏ってしまっていた。そこで、一幕で瀕死のファンチーヌが歌う *Come to Me* という歌のメロディーに *On my own* を使い、愛するマリウスに振り向いてもらえない傷心のエポニーヌが *On my own* を歌うことで、世代を離れた悲しみの歌としての役割を担うようになった。このような同一メロディーが何度も使われる仕掛けは他の曲でも見られる。英語版ミュージカルではこのような同じメロディーの繰り返しののおかげで主要人物たちの心理を対比・対象的にかたることに成功していると渡邊は指摘する(2002, 85)。

3 つ目の変更点は、一幕のフィナーレで登場人物のそれぞれが革命が起こる日への思いを歌った *One day more* を歌うことで後半の展開へ期待を掻き立てた点である。この曲は、娼婦に身を落としてしまったファンチーヌが歌う *I dreamed a dream* とヴァルジャンの身代わりとして逮捕された男を救うかどうかの葛藤をヴァルジャンが歌う *Who am I?* という曲のメロディーを掛け合わせたものである。まだ見ぬ明日への期待や不安が複雑に交錯するフィナーレで、ヴァルジャンが既になじみのある力強いメロディーを歌うことで主役の存在が引き立った。さらに群衆の多重唱を用いたことが、後半への期待をかきたてることにつながった。

4 つ目の変更点は、コゼットのためにバリケードから無事にマリウスが帰還できることを願ったヴァルジャンの歌である *Bring him home* と共にバリケードで戦った仲間が自分以外死去してしまった悲しみをマリウスが歌う *Empty chairs* というマリウスに関する2曲を

追加した点である。この追加によりマリウスが加わった学生蜂起や世代を超えた交情にも重心を置き、群像劇の色合いが濃厚になった。2つ目の変更点でエポニーヌに関する曲 *On my own* が追加されたことを指摘したが、これら2つの変更点よりフランス語版から英語版への変化として、登場人物たちに心情を語る曲をそれぞれもたせたことにより、登場人物たちの人間性がくっきりと浮かびあがり群像劇的側面が強調されたと考えられる。

これらの英語版ミュージカルで追加された工夫は、主要登場人物それぞれの個性を明確にし、人々の結びつきが有機的になって、もともと原作が内包していた群像劇の分厚さを十二分に表現させたことと小山内は指摘する (2007, 74)。つまり題名であるレ・ミゼラブルの意味、惨めな人々、つまり激動の19世紀フランス社会に生きた民衆をそれぞれ主役級にみ立てることに成功したため、英語版ミュージカルは多くの人々に受け入れられる作品となったのではないかと考えられる。

本節では、原作小説からフランス語版ミュージカルを経て英語版ミュージカルが作られたという経緯を明らかにした。このように経緯をたどってみると英語版ミュージカルはRSCによるフランス語版ミュージカルに施された変更の結果人気になったことがわかった。英語版ミュージカルは変遷を経ることで、主要登場人物それぞれの個性を明確にし、人々の結びつきが有機的になって、もともと原作が内包していた群像劇の分厚さを十二分に表現し、観客が感情移入をしやすい作品となったといえる。

3-2 評価分析

本節では英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』が具体的に世界でどのような評価を得ているかを明らかにしていく。そこで実際にミュージカルを観劇した者たちの意見からどのような人々が観劇しどのような評価をしているか、レビューをもとに分析する。

大衆の意見として TripAdvisor (トリップアドバイザー) を参照した。TripAdvisor (以下当該サイトと示す) では700万を超える宿泊施設や観光名所を対象とした5億件以上の口コミ情報を掲載している。旅行者がどこに滞在し、何をして、どこで食事をするかを決定するうえで参考にできる大衆の意見を掲載した世界最大の旅行情報サイトである。英語版ミュージカルの劇場 the Queen's Theatre¹に寄せられた全レビュー数は、2010年3月17日から2017年7月5日(以下閲覧日とする)の時点で7855件であり、当該サイト内にあるロンドンの劇場・コンサートというセクションのランキングで1位となっている。参考までに『レ・ミゼラブル』に並びロンドンでロングラン公演を続ける『オペラ座の怪人』の同時期のレビュー数は6304件であり、1000件以上ものレビュー数の差が見受けられた。

当該サイトでは、レビューする者はミュージカル『レ・ミゼラブル』を Excellent/ Very

¹ ロンドンのウエスト・エンドでは1つの劇場で1つの作品を継続的に上演している。そのため the Queen's Theatre とは英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』専用の劇場である。TripAdvisor の the Queen's Theatre に寄せられたレビューには、英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』に対する評価が含まれていることを前提とする。

good/ Average/ Poor/ Terrible の 5 段階で評価できるようになっている。閲覧日時点での全レビュー数 7855 件のうち、Excellent : 5892 件/ Very good : 725 件/ Average : 221 件 / Poor : 64 件/ Terrible : 54 件となっておりかなり高評価が多いことがわかった。また、当該サイトでは全レビューの作成者を旅行形態、言語別、月別に分類している。旅行形態内訳は Families : 1713/ Couples : 2972/ Solo : 471/ Business : 202/ Friends : 1634 であった。言語別内訳は、English : 6958/ Portuguese : 229/ Spanish : 192/ Italian : 100/ Chinese(Trad.) : 87/ Chinese(Sim.) : 87/ Japanese : 87/ French : 84/ German : 48/ Dutch : 34/ Russian : 23/ Swedish : 22/ Norwegian : 21/ Korean : 18/ Danish : 14/ Greek : 5/ Polish : 5/ Turkish : 2/ Hebrew : 1 となっている。この言語別内訳から英語でもっとも多くレビューが書かれていることがわかる。そしてイギリスのミュージカル専門のラジオでの人気投票で第 1 位を獲得したという *the Guardian* における 2013 年 8 月の演劇評論家のトルーマンの記事から、英語版ミュージカルはイギリスで圧倒的に人気をほこっていることがわかる。2 番目に多いポルトガル語、3 番目に多いスペイン語は、現在南米で英語版ミュージカルが公開されていることに関係があるのではないだろうか。また日本語よりもフランス語のレビュー数が少なくなっていた。そこでフランス語でレビューした者の内訳をみると、France 58/ 不明 7/ Belgium 6/ Canada 5/ Czech 2/ United Kingdom 1/ America 1/ Spain 1/ Luxembourg 1/ Algeria 1/ Switzerland 1 となっている。つまり英語版ミュージカルはフランス人には人気がないのではないかと思われる。このことについて渡邊が「フランスの歴史・風土に根ざした、よりフランス固有のミュージカルから、世界に開かれた普遍的なミュージカルへとその裾野をひろげていった」(2002, 93) と指摘しているように、フランス語版ミュージカルから英語版ミュージカルへの変遷により、英語版ミュージカルが原作小説を知らない観劇者に向けて作られた作品であるため、国民文学としてなじみのあるフランス人にとっては物足りない作品になったのではないかと考えられる。

より具体的な評価を得るために閲覧日から 2017 年 2 月 4 日までさかのぼり計 214 件の過去のレビューを閲覧した。その中では emotional という感想をもつ者が多かった。このことから英語版ミュージカルは感動的な作品で観客が感情移入しやすい大衆向けの作品であると考えられる。そして誕生日や結婚記念日などのプレゼントとして英語版ミュージカルを観劇している者が多くいた。カップルについて家族形態で観劇している者が多いことから、幅広い年代に広く受け入れられる作品であるといえる。別の意見としてキャスト、オーケストラ、雰囲気、すべてにおいて Perfect という意見も多く目立った。また、映画版を見た観客にとっても満足いく作品であるというレビューもいくつか存在した。英語版ミュージカルを元にして作られた映画版はトム・フーパー監督、主演ヒュー・ジャックマンの下 2012 年に制作された、これまで作られたミュージカル映画と異なる撮影方法で作られた作品のことである。これまでのミュージカル映画は、俳優が歌う歌を先に録音しその録音した音を流しながら映像を録画していくという撮影方法であったが、映画版では映像を録画するときに俳優が生で歌い、歌と映像を同時に録画するという撮影方法を採用した。

これにより、映像に臨場感が生まれ、現在もウエスト・エンドで上演を続けている英語版ミュージカルにより近い映像を作ることができた。映画版は、英語版ミュージカルと同様に全編を通して歌で演じられ、ストーリーの展開も話の展開をわかりやすくするために曲の順番が入れ替えられたり、*Suddenly*というヴァルジャンがコゼットを引き取ってから今まで感じたことのない愛という感情に驚きとまどう曲を追加したりしているが、できるだけ英語版ミュージカルと差異がないように作られている。アカデミー賞にノミネートされるなど話題を多くさらった映画版が、日本などのようにミュージカルになじみがない国にもミュージカルの魅力を伝える役割を果たしているのではないかと考えられる。以上のレビュー分析から、英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』は一般的に高評価を受けていることがわかった。

そしてレビューでは音楽のすばらしさについて語る者が多かった。英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』の魅力といえば音楽であると言われていることは、マッキントッシュがフランス語版の音楽に魅せられて英語版ミュージカルを制作するにいたったことから伺える。演劇評論家の萩尾も音楽こそが英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』を魅力的にしていると指摘している。英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』の音楽は、「第一主題、第二主題、第三主題、...といったようにメロディー各々が主題を持ち、それらがソロ、あるいはコーラス、またアンダースコアで編み合わされて、大きなドラマのタペストリーを形成している」(13)と萩尾は説明している。具体的には、第1幕でヴァルジャンが司教と出会い生まれ変わる決心を歌う *Soliloquy* と、第2幕でジャヴェールが自殺を決心する際に歌う *Soliloquy* には同じメロディーが使われていることを指摘し、この2曲に共通するメロディーが既存アイデンティティの崩壊を意味していると主張している。同様の仕掛けが、プロローグの最初で歌われる *Prologue* とガヴローシュをはじめとする1832年のパリの民衆が歌う *Look Down*、娼婦たちが歌う *Lovely Ladies* と革命に失敗した学生たちを思う女性たちが歌う *Turning* にも使われており、それぞれ虐げられた者のあえぎを意味するメロディー、変わらない運命への嘆きを意味するメロディーとして使用されていると指摘している(13)。このように主題をもつメロディーを聞くことによって観客はドラマがつながっていることを理解できると考えられる。以上よりミュージカル『レ・ミゼラブル』の人氣を支える要因の1つとして音楽の魅力が考えられることは明らかである。

一方低評価は、他の劇場より小さい、トイレが少ないなど施設に対する不満が多く見受けられたが内容に関する低評価はほとんど見られなかった。しかし、演劇評論家の中にはミュージカル『レ・ミゼラブル』の内容を批判している者もいる。ヴァーメットは一般的な批判として英語版ミュージカルが陰鬱な作品であると批判されていることを指摘している(12)。しかし、このような批判に対抗してヴァーメットは英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』が悲劇的なオペラに近いことを指摘し、オペラに匹敵する規模、深刻さ、情熱があり、通常ミュージカルの歌詞とは異なりウィットや気の利いた言い回しを使うのではなく、物語の語りに観客を引き込むようにしていると主張する(12-13)。そこで本論文

ではミュージカル『レ・ミゼラブル』の内容こそが人気の理由であると仮定し、次章で原作小説と英語版ミュージカルを比較することによって、ミュージカルの内容という観点からミュージカル『レ・ミゼラブル』の人気の理由を探っていく。

本節では、ミュージカル『レ・ミゼラブル』が世界でどのような評価を得ているかについてレビュー分析をもとに論じてきた。レビュー分析では高評価が多くなっており、その中でも **emotional** や **perfect** という評価が目立った。そこで萩尾の論を用いて、特にミュージカル『レ・ミゼラブル』の音楽が観客を引き付けることを論じた。さらに、英語によるレビューが最も多い中、日本語よりもフランス語のレビューが少ないことからフランスでは人気がないといえるのではないかと考えられる。また英語版ミュージカルへの批判的な意見を参照し、その批判の対象である悲劇的な物語こそがミュージカル『レ・ミゼラブル』の魅力であると仮定した。次章では原作小説と英語版ミュージカルを比較し、英語版ミュージカルがなぜ人気であるのかを物語の内容の比較という観点から探っていく。

3-3 原作小説との比較

本節では、原作小説と英語版ミュージカルを比較し英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』の人気の理由を探っていく。本論文第3章第1節で、英語版ミュージカルは2人のフランス人によってフランス語で作られた作品であり、そのフランス語版ミュージカルを元にRSCによって登場人物が強調された作品となったことを確認した。そこで本節では、英語版ミュージカルと原作小説の内容を比較することによって英語版ミュージカルが人気である理由を分析する。

原作小説については本論文第一章で分析をしている。原作小説は、作者であるユゴーが19世紀フランス社会を再創造するために書いた作品である。ユゴーは執筆以前から関心のあった貧困というテーマを登場人物に託し小説を執筆し始めたが、最終的にユゴーの思想が存分につめこまれた部分が加筆されたことにより、原作小説が宗教的な観点、政治的な観点、社会的な観点などあらゆる観点で分析される作品となったことを明らかにした。一方、英語版ミュージカルでは哲学的な部分が一切排除されている。代わりに英語版ミュージカルは、登場人物1人1人の心情を歌った曲をもたせることにより観客が感情移入しやすくなるような工夫をほどこした作品であった。その結果原作小説が内包していた群像ドラマの側面が強調されたとミュージカル評論家の萩尾は主張する(12)。

特に個人のミュージカルナンバーによって誇張されている登場人物の一人にエポニーヌが挙げられる。そしてエポニーヌの存在が誇張されたことによって演劇評論家のピリントンが”a lurid Victorian melodrama produced with Victorian lavishness”と2010年9月の*the Guardian*内で指摘しているような劇に原作小説から英語版ミュージカルは変化したのである。エポニーヌはマリウスへの叶わぬ恋心を秘め、マリウスに託された手紙をコゼットに届けるためにバリケードから出て、その帰りに撃たれて亡くなってしまう。原作ではエポニーヌが嫉妬する場面が描かれているが、英語版ミュージカルでは単に恋ゆえの自己

犠牲に散る女性として描かれているため、特に女性観客から絶大な支持を集め、最終的にマリウスと結婚するコゼットよりも人気を博し、実質的なヒロインとみなされる。反対に「テナルディエから救い出された後、いかにコゼットが少女期から思春期を送ったかが、このミュージカルでまったく切りすてられていることに、劇化としての特徴をみるべき」(17)であると詩人の中村が指摘しているように、シンデレラストーリーを歩むコゼットが修道院という社会から隔離された環境で孤独に成長するというシーンが排除され、ミュージカルでは中村が指摘するところの「世間知らずのお嬢さん」(17)として描かれている。またコゼットと結婚するマリユスの生い立ちも英語版ミュージカルでは排除されている。王党派の祖父の下に育ったマリユスだがナポレオンの軍人であった父の偉大さに気づき、王党派の祖父に反抗し家出し仕送りも断り1人で極貧の生活を続けるというマリユスの生活がまったく描かれていない。よってマリユスは英語版ミュージカルでは、家出したうえに革命に失敗したが、恋愛による結婚というハッピーエンドを迎えるただの「苦勞知らずの学生」(17)であるとみなされてしまうと中村は指摘している。

原作小説と異なりこういった登場人物1人1人の役割が誇張されたのに対し、物語自体は原作小説とほとんど同じである。これは原作小説に演劇的小説作法が使用されているためであると稲垣は指摘する(2007, 111)。演劇的小説作法とは演劇作法を手本にした小説の作り方のことを表し、ユゴーは原作小説で何度も偶然の一致が重なるメロドラマ的一面を描き、また、物語の結末に大団円としての武装蜂起を配置した。このためミュージカルとして原作の物語は変えずに物語を要約することが可能であった。また、テナルディエの存在も劇的である。テナルディエは「たえず悪事をたくらむがつねに滑稽な結果に終わる」(19)ことから、典型的な悪漢の役割を担っていると西永は指摘している。英語版ミュージカルではテナルディエを特に滑稽に描くことに成功している。このように、劇的な小説作法をもった小説の物語を要約し登場人物の心情を歌で表現することで1人1人の役割を深く描き出しミュージカル化した作品が英語版ミュージカルなのである。このため観客は十人十色な性格をもった登場人物に感情移入することが可能なのである。

さらに原作小説で登場人物が体現していた貧困というテーマが映画版ミュージカルの主題となった。ユゴーは19世紀フランス社会に出現した貧困という課題に心を動かされ原作小説を著したと本論文第2章第3節で論じたが、この貧困という課題は現代でも解決されていない。それどころか現代では貧困によって格差社会が広がってしまっている。そしてこれは原作小説が生まれたフランスや、英語版ミュージカルが上演されているイギリスだけにとどまる問題ではない。今では地球上の大問題となっており現代人が解決を望む問題なのである。よって貧困が蔓延る社会のもと懸命に生きる民衆を描いた英語版ミュージカルが世界で人気を博しているのは、英語版ミュージカルの内容が現代の課題に適合しているからであるといえる。そしてユゴーは19世紀フランス社会の貧困という課題を取り上げて自身で理想的な社会を建設していくという意図をもって原作小説を著わしたことを原作小説の冒頭である第1巻4ページで以下のように示している。

法律と風習があるために、社会的処罰が存在し、文明のただなかに人工的な地獄をつくりだし、神意による宿命を人間の不運でもつれさせているかぎり、また貧乏のための男の落伍、飢えのための女の墮落、暗黒のための子供の衰弱という、現世紀の三つの問題が解決されないかぎり、またあちこちで社会的窒息が起こりそうであるかぎり、言葉をかえてもっと広い見地に立って言えば、地上に無知と悲惨がある以上、本書のような性質の本も無益ではあるまい。

一八六二年一月一日　オートヴィル・ハウスにて

このようにユゴーは貧困が社会的問題でありこの問題が解決されるまでは多くの人に読まれるように想定して原作小説を書き上げ、原作小説『レ・ミゼラブル』は事実世界で多くの人に読まれる作品となったと考えられる。

本節では、原作小説と英語版ミュージカルを比較しながら、英語版ミュージカルの人気の理由を探ってきた。英語版ミュージカルとは、原作小説が内包していた群像劇的側面を誇張した作品であり、エンターテイメント色が強く出ている。英語版ミュージカルでは、原作でユゴーの思想が多く語られていた哲学的部分が排除され、ストーリー展開が強調されそれぞれの登場人物が色濃く語られることになった。原作小説には演劇的小説作法が使用されており、そして、ユゴー自身が述べるようにどの社会にも当てはまるような問題を扱っていた。そのどの社会にも当てはまる貧困という物語を英語版ミュージカルの主題として置いたことが英語版ミュージカルの人気の理由であると結論付けることができる。

本章では、英語版ミュージカルが作られるまでの変遷をたどり原作小説と比較することから英語版ミュージカルの人気の理由を明らかにしてきた。原作小説からフランス語版ミュージカルを経て英語版ミュージカルが作られる際に主要登場人物それぞれの個性を明確にし、もともと原作が内包していた群像劇の分厚さを十二分に表現し、観客が感情移入をしやすい作品としたという変更点を明らかにした。英語版ミュージカルはこの変更の結果人気になった。そしてミュージカル『レ・ミゼラブル』が具体的にどのような評価を受けているのかレビュー分析と評論家の評価をもとに論じた。レビューでは高評価が多くなっており、特にミュージカル『レ・ミゼラブル』の音楽が観客を引き付けていることが明らかとなった。そして原作小説と英語版ミュージカルを比較し、英語版ミュージカルでは、原作でユゴーの思想が多く語られていた哲学的部分が排除され、原作小説に用いられていた演劇的小説作法から物語を演劇的に要約し、劇的なストーリー展開が強調されそれぞれの登場人物が色濃く語られることになったことが人気の理由であると結論付けた。

終章

英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』は1985年から現在までロングラン公演を続け、世界各地で各国の言語に翻訳された作品が作られるなど世界で人気を博している作品である。本論文では英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』の人気の理由を探ることを主題として、原作小説『レ・ミゼラブル』から英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』が完成するまでの変遷をたどり、原作小説と英語版ミュージカルの相違点という観点から人気の理由を探究してきた。

まず第1章では、英語版ミュージカルのもととなる作品である原作小説『レ・ミゼラブル』が作られる背景として、原作小説の舞台となる19世紀フランス社会とその時代に成立した思潮であるロマン主義、そしてそのロマン主義文学を主導したユゴーの生涯と彼の思想について述べた。19世紀フランス社会は、近代市民社会が成立し最終的に共和派が勝利していくという移行期間であることを明らかにした。そしてその移行期間に成立したロマン主義という思潮は、現代につながる新しい価値観を人々に提供する思潮であった。ユゴーは劇作家として古典主義を打ち負かしたのち、ロマン派第1世代を主導し19世紀フランス社会で聖職者的な役割を果たしていた。それをふまえてユゴーの生涯から、ユゴーは劇作家としてだけでなく、詩人として、政治家として、社会運動家として19世紀フランス社会の幅広い分野で活躍していた。原作小説『レ・ミゼラブル』はユゴーが自身の宗教哲学を完成させ、また共和主義者として自覚した後の1862年に書かれた作品であった。

続く第2章では原作小説『レ・ミゼラブル』の作品分析をおこなった。初めに原作小説の執筆過程をたどり、ユゴーが死刑制度廃止という人道主義的観点からこの物語を書き始めたことを論じた。そしてユゴーは、共和主義者として自身の思想を完成させたあとに原作小説に多くの加筆を加えていることを明らかにした。原作小説『レ・ミゼラブル』にはユゴーの思想が存分に詰め込まれており、その思想が多くつめこまれた「哲学的部分」こそ原作小説の魅力であると論じた。そこで哲学的部分に含まれている貧困と社会主義、進歩という思想、死刑廃止論、宗教観という4つの思想について論じ、それら4つの思想は現代のわたしたちの理解の範疇を超える思想であることがわかった。そこでユゴーが執筆の初めからテーマとしていた貧困についてそのテーマを託した登場人物の分析を通して論じた。主人公であるヴァルジャンは、19世紀フランス社会におけるイエス・キリストとして描かれ、19世紀を創造したナポレオンのバトンを引き継ぐ形で19世紀を創造する人物として描かれていた。そして原作小説内でヴァルジャンの思想を引き継ぐマリユスはユゴーがモデルとなっていた。つまり、ナポレオンからジャン・ヴァルジャンが引き継いだ世紀創造のバトンは、ユゴーへと引き継がれている。原作小説内でユゴーは、19世紀世界の再創造をしていると考えられた。そして英語版ミュージカルにも登場する人物について考察しユゴーの貧困に対する姿勢を明らかにした。以上のように原作小説は宗教的な観点、政治的な観点、社会的な観点などあらゆる観点から分析できる作品である。

そして第3章では、原作小説と比較することで英語版ミュージカルの人気の理由が明ら

かになるという前提のもと、英語版ミュージカルについて論じた。英語版ミュージカルの制作は原作小説からフランス語版ミュージカルを経るという経緯をたどり、英語版ミュージカルはロイヤル・シェイクスピア・カンパニーによるフランス語版ミュージカルに施された変更の結果人気になったことがわかった。そして英語版ミュージカルが具体的にどのような評価を受けているのかレビュー分析と評論家の評価をもとに論じてきた。レビュー分析では高評価が多くなっており、特に英語版ミュージカルの音楽が観客を引き付けることを論じた。そして、英語版ミュージカルは原作小説の哲学的部分が排除されている。これにより原作小説が内包していた群像劇的側面が誇張されている。劇的なストーリー展開が強調された結果それぞれの登場人物が色濃く語られることになった。そして、ユゴー自身が述べるように原作小説ではどの社会にも当てはまるような問題を扱っていた。そのどの社会にも当てはまる貧困という物語を英語版ミュージカルの主題として置いたことが英語版ミュージカルの人気の理由であると考えられた。

本論文では、英語版ミュージカルの人気の理由は原作小説と英語版ミュージカルの相違点にあることを明らかにした。原作小説はユゴーのあらゆる思想が存分に詰め込まれており宗教的な観点、政治的な観点、社会的な観点などあらゆる観点から分析される作品である。一方英語版ミュージカルはユゴーの思想が存分に詰め込まれた哲学的部分が排除され、原作小説の物語に焦点が当てられた作品である。よって英語版ミュージカルの人気の理由は、原作小説における「哲学的部分」が排除され、代わりに音楽によって群像劇的側面が強調され貧困というテーマが主題となったからであると結論付ける。そして、一般的に大衆向けでありあまり研究対象とみなされない英語版ミュージカル『レ・ミゼラブル』を分析したことに本論文の意義を見出せる。

参考文献

- 稲垣直樹『「レ・ミゼラブル」を読み直す』白水社, 2007年
- . 「『レ・ミゼラブル』(1862)の普遍性と現代性—ミュージカル映画(2012)から見る原作の特質」『日仏医学』日仏医学会, 35巻, 1号, 6-17, 2014年
- 稲垣直樹・鈴木啓二「詩」『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社, 2014年, 44-70
- 稲垣直樹・高橋信良「演劇」『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社, 2014年, 71-98
- マーガレット・ヴァーメット『「レ・ミゼラブル」をつくった男たち—ブーブリルとシェーンベルク そのミュージカルの世界』三元社, 2012年
- ブリュノ・ヴィアール『100語でわかるロマン主義』小倉孝誠・辻川慶子訳, 白水社, 2012年
- 小倉孝誠「文学が輝いていた時代」『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社, 2014年, 9-14
- 小山内伸『進化するミュージカル』論創社, 2007年
- . 『ミュージカル史』中央公論新社, 2016年
- 辻昶『ヴィクトル・ユゴーの生涯』潮出版社, 1979年
- 中村稔「ミュージカル『レ・ミゼラブル』について」『ユリイカ』青土社, 45巻, 14号, 8-26, 2013年
- 西永良成『「レ・ミゼラブル」の世界』岩波新書, 2017年
- 萩尾瞳「音楽が紡ぐ壮大なドラマ ミュージカル『レ・ミゼラブル』の魅力」『ふらんす』白水社, 92巻, 5号, 12-14, 2017年
- ベネディクト・ナイチンゲール・マーティン・パルマー『レ・ミゼラブル—舞台から映画へ—文と写真でたどるミュージカルの歩みと思い出のアイテム』日之出出版, 2013
- 渡邊芳敬『「レ・ミゼラブル」から『レ・ミゼラブル』へ』『横浜市立大学論叢人文科学系列』53巻, 73-105, 2002年
- . 「ヨーロッパ発ミュージカルの現在—ロック・オペラからスペクタクル・ミュージカルへ—」『早稲田大学教育学部 学術研究(複合文化学編)』56号, 37-55, 2008年
- ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』1-5巻, 佐藤朔訳, 新潮社, 1967年
- . 『私の見聞録』稲垣直樹編訳, 潮出版社, 1991年
- Behr, Edward. *THE COMPLETE BOOK OF Les Miserables*. New York: New York, ARCADE PUBLISHING, 2016.
- Billington, Michael. “Twenty-five years on, They ask me if I was wrong about Les Misérables....” *The guardian*, September(2010).
<https://www.theguardian.com/stage/theatreblog/2010/sep/21/les-miserables-25-year-anniversary>(参照 2017-12-18)

Metzidakis, Angelo. "On Rereading French History in Hugo's *Les Misérables*" *The French Review*. 67(2)1993. 187-195.

Trueman, Matt. "Les Misérables voted greatest musical of all time." *The guardian*, August(2013).

<https://www.theguardian.com/stage/2013/aug/28/les-miserables-voted-greatest-musical>(参照 2017-12-18)

Welsh, Alexander. "Opening and Closing *Les Misérables*" *Nineteenth-Century Fiction*. 33(1)1978. 8-23.

【CD】

Les Misérables THE COMPLETE SYMPHONIC RECORDING. First Night Records, 1988

【HP】

Dewynters Ltd. "ABOUT THE SHOW." *Les Misérables*. <https://www.lesmis.com/> (参照 2017-12-28)

Tripadvisor HONGKONG, "Les Misérables London." TripAdvisor LLC

https://en.tripadvisor.com.hk/Attraction_Review-g186338-d2402486-Reviews-Les_Miserables_London-London_England.html (参照 2017-7-5)